

## 巻頭言

### ライフワークを持つ喜びと困難と

近畿大学医学部免疫学教室  
教授 宮澤正顯

昔から言われていることだが、研究者には自分のライフワークと見定めた研究対象に拘り、積み上げてきた経験と蓄えてきた材料を活用して、何年かをかけて成果を拡大させ、また深化させていくタイプと、自分の持つ優れた手技や能力を利用して、その時々  
の流行に乗った業績を矢継ぎ早に出して行くタイプ（ここでは、後者を「流行サーフィン型」と呼ぶことにする）とが存在する。このどちらにも属さない研究者は、大きな研究費を得ることも自分の研究グループを維持することもできないから、その時点でアクティブである研究者は、多かれ少なかれどちらかの形を貫いて生き残っていると言えるであろう。



前者のようなライフワークスタイルは、数学や基礎物理学の世界では典型的であり、一生を賭けて1つのテーマに取り組み続ける研究者が多くいる（或いは、いた）。私も、学生の頃には岡潔氏の自伝的著作などに感銘を受けたものだ。しかし、特に素粒子物理学などの世界では、現在では一人の人間が研究に必要な巨大な設備機器の全てを準備することは不可能であり、強力なリーダーシップと国家的な支援の下、多数の有能な研究者が国際的なチームを組んで、1つの仮説を検証するというシステムが一般化している。この場合でも、明確な目標の下に緊密なチームワークが組み立てられていれば、共同研究グループを構成するメンバーの一人一人が、自分の仕事をライフワークと考えることができているのかも知れない。

翻って、我々の関わる医学の世界はどうか。

目の前に現れる患者の一人一人に対し、それぞれ最大限の利益をもたらす介入法を的確に選択し提供するという医師の役割は、必然的に目前の課題への対応の繰り返しを求める。日々の診療の中からは、ライフワークのヒントとなる医学的観察や、未解決の多くの疑問が生まれて来るであろう。それら研究の萌芽を、具体的な成果へと育て上げることができるかどうかを決めるものは何か？ある人は指導者または研究グループの力と言うかも知れない。またある人は業務環境と言うかも知れない。観察事実の記述に際して、遺伝子発現やタンパク質構造レベルのデータを要求される現在では、研究環境の先進性こそが必要な条件であると考えられる人もあろう。本学部と附属病院のような、診療現場に基礎的解析手技が緊密に連携した施設では、日々

の診療から生じた研究の萌芽が、他より容易に開花するとも言えるかも知れない。

それでは、医学研究におけるライフワーク型と流行サーフィン型の違いはどこから生まれるか？私は、それは「専門性」であると考える。

川崎富作による川崎病の発見も、高月清による高月病や成人 T 細胞白血病の発見も、専門性の中から生まれてきた。専門性を持った医学研究者の下には、その専門性に沿った患者が集まり、他の医師から専門性に沿った問い合わせや紹介が行われる。自らの専門領域に真剣に向き合うことで、周囲からの信頼が生まれ、自ずと経験と材料とが蓄積されていく。ライフワークの萌芽となる医学的疑問を検証するための材料は、既に手許に集まっているか、自らの専門性を武器に比較的容易に集めることができる。そして、専門家としての評価が、研究費の獲得をも助ける。その点では、専門医制度は研究志向を持った医師の育成と矛盾するものではないと思う。

基礎医学研究でも全く同じである。綿密なデータ収集と正直な事実の記載によって作られた論文は、他の研究者の仮説形成に出発点として引用され、再現性が確認されることで専門分野での評価が確立する。そして、抗体や遺伝子改変マウスなどの材料が繰り返して利用され、あの論文を書いたのはお前かと、互いに信頼し尊敬する仲間が増えていく。ライフワークは個人の仕事に留まらず、信頼と尊敬によって結ばれた研究者の絆によって支えられ、継続する人生そのものとなる。

問題は、専門性に基盤をおいたライフワークをどのように維持していくかである。日常の診療に追われる臨床医学の研究者にとっては勿論であろうが、実は基礎医学研究者にとっても、ライフワークから眼を逸らさせるような *distractive* な要因はいくらでもある。ごく近い将来の実用化の見通しと、潤沢ではないがある程度有効な研究費の約束を伴った受託研究、それなりによく知られた学術雑誌からの論文査読の依頼、大学の役職、商業雑誌からの総説執筆の依頼。寺田寅彦が愛弟子の中谷宇吉郎に対し、教授になってもそれ以上の役職には就くなと厳命したのは有名な話だ（中谷はこれを一生守ったという）。また、江橋節郎は、総説論文の執筆依頼を全て秘書に断らせていたという。

最大の *distraction* はしかし、論文を読みすぎることではないか。優秀な研究者であればあるほど、最先端の研究テーマに迫り着こうとし、論文をたくさん読み、他の研究者グループも取り組んでいるテーマを採り上げて、逸早く結果を出すことでトップに立とうとする。しかし、自分が乗ろうとしているその波は、次々と押し寄せるたくさんの波の中で、たまたま現時点で岸に近いだけの一つなのか、それとも、数年・十数年に一度しかやって来ない、本当のビッグ・ウェーブなのか？今来ている波に乗ることばかりを考えると、ビッグ・ウェーブの到来に気が付かず、飲み込まれて藻掻くだけに終わりほしないか。

江橋節郎は弟子たちに向かって、他人の論文を読むなと繰り返していたと言うが、同じことは時代を切り拓く成果を挙げた多くの研究者が言っている。そういう意味での自信と鈍感さは、ライフワークを維持できる研究者にとって必須の資質であるかも知れない。

(本文中敬称略)